

パーキンソン病とは

〈総監修にあたって〉 **武田 篤先生** (独立行政法人 国立病院機構 仙台西多賀病院 院長)

パーキンソン病治療で重要なことは、正しい情報をもとに、患者さんご自身とご家族、そして医療関係者が相談しながら、それぞれの患者さんにとって適切な治療を選択することです。このコンテンツでは、毎回、みなさまの治療と日常生活の改善にお役に立てるような情報をお届けします。

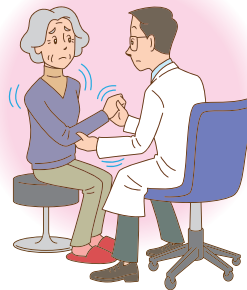
……パーキンソン病の主な症状はどのようなものがありますか

パーキンソン病は、からだの動きに関係のある症状(運動症状)が主に出る、ゆっくり進む脳神経内科の病気です。主な運動症状には次の3つがあります^{1,2)}。

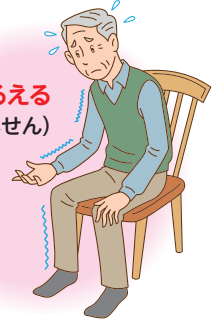
●パーキンソン病の主な運動症状(三大症状)



手足や体幹がこわばる
(筋強剛：きんきょうごう)



手足がふるえる
(振戦：しんせん)



……パーキンソン病の運動症状以外の症状にはどのようなものがありますか

パーキンソン病では、運動症状以外の症状(非運動症状)もみられます。主な非運動症状には次のようなものがあります³⁾。

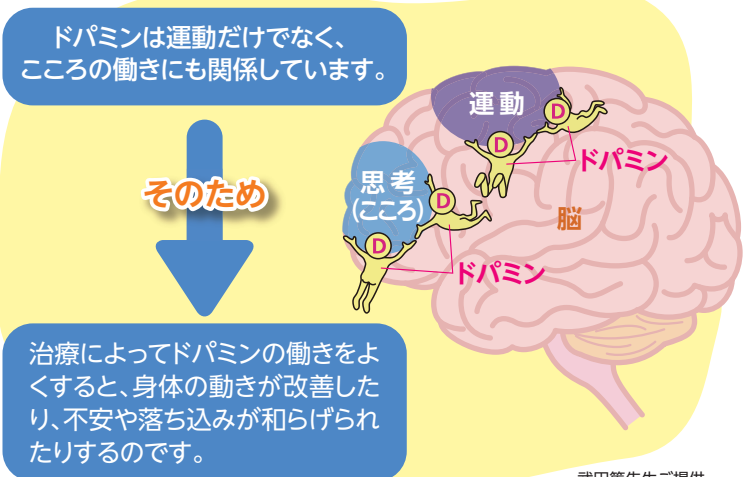
●パーキンソン病の主な非運動症状



……パーキンソン病のいろいろな症状はどうして起こるのですか

私たちが手足を動かしたり、汗をかいたり、胃や腸で食べたものを消化したりする過程には、脳からの指令(信号)がかかっています。この信号は全身の神経を通じて全身に送られますが、信号を送る時には神経伝達物質という物質が送る仲立ちとなります⁴⁾。パーキンソン病では、脳の黒質(こくしつ)という部分の神経細胞が減って少なくなり、そこで作られるドパミンが不足して、脳からの信号が伝わりにくくなって起こります^{1,2)}。

脳は、運動にかかわる部分や、思考(気分やこころの動き)にかかわる部分などに分かれて、からだをコントロールしています。そのため、たとえば運動にかかわる部分のドパミンが不足すると運動症状が起き、思考にかかわる部分のドパミンが不足すると精神症状が起きるといふことになります。



…………パーキンソン病は病状が進んでゆく病気ではないのですか

パーキンソン病は脳の黒質という部分の神経細胞が減ることによって起こりますが^{1,2)}、減った神経細胞が増えるということはないため、長い時間をかけて徐々に病状は進んでゆきます。しかし、パーキンソン病が直接の原因となって患者さんが亡くなることはなく、治療が進歩した現在では、健康な人と寿命はほとんど変わらなくなっています。

ただ、パーキンソン病では運動症状や非運動症状などの幅広い症状が出るため、患者さんは日常生活を送りにくくなるなどにより、生活の質(QOL)が低下することになります。

お薬・リハビリテーション・手術など適切な治療を続けることで、日常生活に大きな支障なく10年、20年と生活している方もいらっしゃいます。

パーキンソン病の治療目的⁵⁾

パーキンソン病の……

- (1) 病状の進み方を緩やかにする
- (2) 日常生活の妨げとなる症状を軽くする

リハビリテーション お薬 手術

…………パーキンソン病の治療の基本と最近の課題

パーキンソン病の治療の中心となるのは、不足しているドパミンを補うドパミン補充療法*などの薬物療法です。ドパミン補充療法は治療を始めて3~5年間はよく効いてほぼ普通の生活が送れる期間(ハネムーン期)があるのですが、黒質の神経細胞が減ってゆくに従い効き目が悪くなってきて、ドパミンが効いている時間が短くなるウェアリング・オフや、ドパミンが効いているときに手足が勝手に動いてしまうジスキネジアが現れます。ウェアリング・オフやジスキネジアなどのことを運動合併症といいます⁶⁾。

*ドパミンを服用しても脳内に届かないため、実際には脳に入った後にドパミンに変化するL-ドパという物質を薬として服用します。

薬がよく効く

運動合併症
ウェアリング・オフ
ジスキネジア

ハネムーン期 進行期

最近、

- ドパミン補充療法の効き目が落ちてきた時
 - ドパミン補充療法が効きにくい時
- どうするか?ということが課題になっています。



…………パーキンソン病で寝たきりになるのが不安です

パーキンソン病はきわめてゆっくりですが、進んでゆく病気です。この「進んでゆく」という言葉を気にされる方は多くいらっしゃるでしょう。しかし、からだの機能は年をとるにしたがって徐々に衰えてゆきます。パーキンソン病患者さんの日常生活の不自由の一部には加齢もかかわっています⁷⁾。不自由のすべてが、パーキンソン病によるものとは限らないのです。

また、「寝たきりになるのでは」「一度薬を飲み始めたら、薬がどんどん増えて副作用に苦しむのでは」「寿命が短くなるのでは」などと心配される方もいらっしゃるのではないのでしょうか。これは何十年か前のパーキンソン病のイメージです。現在では、早めに様々な治療法を駆使して、治療することにより良好な状態を長期間保てるようになっていきます⁸⁾。

パーキンソン病の進行は、防止できる

かつてのパーキンソン病の一般的な理解

寝たきり……? 大量の薬……? 副作用……?

長生きできない……?

診断 パーキンソン病

しかし今では

早めに治療をすれば良好な状態を長期間保つことができますよ

診断 パーキンソン病

村田美穂(監修): スーパー図解パーキンソン病. 法研, 東京, pp20-21, 2014.



武田 篤先生
からのコメント

パーキンソン病の研究や治療は、近年めざましく発達し、さまざまな選択ができるようになってきました。正しい情報を入手すること、そしてあきらめずに治療を続けることが大切です。

参考資料

- 1) 武田篤(柏原健一ほか編): みんなで学ぶパーキンソン病. 南江堂, 東京, pp2-3, 2013.
- 2) 武田篤(武田篤編): パーキンソン病実践診療マニュアル. 中外医学社, 東京, pp2-3, 2016.
- 3) 武田篤(武田篤編): パーキンソン病実践診療マニュアル. 中外医学社, 東京, pp162-210, 2016.
- 4) 村田美穂(監修): スーパー図解パーキンソン病. 法研, 東京, pp34-35, 2014.
- 5) 村田美穂(監修): スーパー図解パーキンソン病. 法研, 東京, pp16-17, 2014.
- 6) 武田篤(柏原健一ほか編): みんなで学ぶパーキンソン病. 南江堂, 東京, pp20-21, 2013.
- 7) 水野美邦: パーキンソン病とともに楽しく生きる. 中外医学社, 東京, まえがき, 2013.
- 8) 村田美穂(監修): スーパー図解パーキンソン病. 法研, 東京, pp20-21, 2014.